

ヨハネの手紙第一2章22-23節 「キリストを否定する者」

1A 反キリスト 22

1B イエスがキリストであることの否定

2B 御父と御子の否定

2A 御父と御子の関係 23

1B 御子を否定して御父を持たない

2B 御子を告白して御父を持つ

本文

ヨハネの手紙第一 2 章を開いてください。今晚は、22-23 節を見ます。「²² 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否定する者、それが反キリストです。²³ だれでも御子を否定する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父も持っているのです。」

1A 反キリスト 22

私たちは、18 節から今が終わりの時として、反キリストが現れるという注意と警告を、使徒ヨハネが読者にしているところを見えています。終わりの日に、キリストが再臨される前に、偽のキリストが現れることを聖書は警告していますが、その流れ、不法の秘密が今も働いていることを学びました。反キリストが多く現れているとありますが、反キリストの霊によって動いている偽教師たちが多くいるということです。具体的にヨハネが念頭に入れていたのは、初代教会の時に猛威を振るったグノーシス主義です。

彼らは、自分たちに隠された知識がある。その知識によって神を知ることができるとしました。それで、ただイエスを自分たちの主として集まり、交わっている兄弟たちから離れて行ったのです。彼らの言っていた言葉は、「あなたがたは、まだ真理を知らない。」というものでした。自分たちがいろんなことを信じていて、その空想話にひかれて行かないから、「あなたは知らない」と言っていたのです。どうでしょうか、私は、しばしば、主にネット上でそういった言い方をする人々に出会います。何か特別な新しい知識や教えを受けて、これこそが正しい見方なのだとして人々に伝え、伝えるだけではなく、知らない人々のことを見下します。そして、ますます同じ傾向の人々のみだけ集まり、そうした情報を共有するのです。あたかも、それを信じないキリスト者は、真理に至っていないかのようです。このような高慢な態度が、「あなたは知らない」ということです。

それに対して使徒ヨハネは、「2:20 あなたがたは聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」と言いました。聖霊が一人一人に与えられているので、この世に生きていな

がら、聖なる神を知る知識があるのだ、真理を知っていると仰いました。イエス様を自分の主として信じる人たちは、知識が足りないとどこかで感じているので、知識がないと言われるとそうかもしれないと思ってしまうのですが、ヨハネは、21 節で、「私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。」と仰いました。真理は知っているのだよ、と励ましています。

そして今日は、彼らは偽り者なのだということから始まります。

1B イエスがキリストであることの否定

²² 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。

イエスがキリストであることを否定する者が、偽り者です。彼らは、真理を知っていると吹聴しますが、イエスがキリスト、つまり、世を救う救世主であることを否定しているのです。

これまで、ヨハネは「偽り」について取り扱っていました。彼らは、その知識によって神との交わりがあると言っていました。ヨハネはこう言います。「1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。」そして、彼らは罪を犯していないと言っていました。肉体は元々、悪だから、肉体に行っていることは罪にならないとしていました。それでヨハネが言います、「1:8 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。」そして、尊大にも、「そんなのは罪ではない」と言っていることは、「1:10 私たちは神を偽り者とすることになり、私たちのうちに神のことばはありません。」と言っています。彼らの言う偽りを、このような形で論駁しています。

そして 2 章に入ると、「2:4 神を知っていると仰いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。」神を知っていると仰いながら、命令を守っていません。そして、仲間から離れ、そうやって兄弟を憎んでいるのですが、「2:9 光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる人は、今でもまだ闇の中にいるのです。」彼らは、自分たちは知識という光を持っている。だから私たちは見えているのだ、と主張します。けれども、兄弟を憎んでいる、仲間から出て行っているということで既に、何も見えていない、闇の中にいるのだということです。こうやって、偽りを暴いていきました。そして、18 節に入って、「今は終わりの時です」と言い始めたのです。多くの反キリストが現れている、偽り者がたくさんいる、と話しています。

そういった人々は、キリスト的な存在を指し示します。キリストは、世を救う方ですが、世を救うも存在として、イエスご自身とは違う存在に持って行きます。ある時は、カリスマ的な指導者。宗教の指導者もそうですし、政治指導者もそうです。ある時は、理想的な社会。ある時は、自分たちの組織や団体。イエスの名は語りますが、しかし、新しい知識だ、これが正しいのだとする時に、そ

の先にあるのは、イエス以外の何かを救世主にしているのです。詩篇の著者は、こう言いました。「詩 118:8-9 【主】に身を避けることは人に信頼するよりも良い。【主】に身を避けることは君主たちに信頼するよりも良い。」

私たちが気を付けないといけないのは、イエス様ご自身が受けた誘惑です。何か目立つものを追ってしまう、目の欲がありますね。主は神殿の屋根の端に連れて行かれて、そこから下に身を投げなさいと悪魔は誘いました。センセーショナルなもの、何かそれっぽいこと、いかにもそうだとおぼろげに思わせるもの、話術。いろいろあります。しかし、イエスがキリストであるのは、苦しみを受けたからであり、苦しまれてその後に栄光に入られました。「ヘブル 12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」

イエス様の働きは地道なもの、地味なものです。そして、この方の教えは、私たちの罪を明らかにします。ユダヤ人は徴を求めていたので、つまずいてしまいました。キリストがローマの十字架につけられる、ということほど、つまずくことはありません。しかし、それで彼らの多くが終わりの日に、偽キリストを受け入れてしまうのです。ダニエル書 9 章 27 節にあります。私たちも、同じ偽りの中に惑わされてはいけません。あくまでも、苦しみを受け、それから栄光に入られたイエスを求めるべきです。自分自身の罪と戦い、その中で主に与えられた使命、その命じられたことを行います。その先に初めて救いがあります。その後で初めて、祭司となり王となる、キリストの御国があります。イエスがキリストであるというのは、そういった告白です。名前と苗字ではありません。ですから、どんなにすばらしいことを話していても、結局、イエス様から目を離すようなもの、そこにある救いは偽りだということです。

2B 御父と御子の否定

そしてヨハネは、「御父と御子を否定する者、それが反キリストです。」と語っています。イエスがキリストであるということをお話したので、そのキリストは御子であるというのが、前提になっています。御子とは、神の子のことであり、私たちのように神から御霊によって生まれた者ということではなく、永遠の昔から父なる神と共におられる方、神ご自身であられます。世を救うキリストが、神の御子であるということは、聖書が啓示しているものです。

詩篇 2 篇 7-9 節、「2:7 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』」神によって生まれたとは、復活を指していますが、復活によって神の御子であることが公に現れました。その方が、世界を支配する王となります。つまりキリストです。

そして、イザヤ書 9 章 6-7 節です。「9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」ここでは、みどりごというのは、人から生まれた赤ん坊のことです。次の、「ひとりの男の子」は、ひとり子と訳したほうがいいですね。神の子ということです。その証拠に、次に続くのは、その神の子が、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父」と呼ばれます。これらはすべて、父なる神ご自身と一つであることを示しています。さらに、「平和の君」とありますが、それがキリストのことです。その後には、ダビデの王座に就くことが書いていますね。キリストについての預言です。

異端は、イエスがキリストであるということを実質的に否定し、また神の子、神ご自身であることを否定します。代表的なのは、エホバの証人です。エホバというのは、主、ヤハウェのことですが、彼らはそう呼んで、自分たちが神の忠実な僕だとします。けれども、イエスは、ミカエルのような天使長であり、造られた存在だとします。そして救いは、信じるだけでなく、忠実にエホバの証人として生きる、その組織の中で忠実であれば、天に入ることができると思います。イエスこそがキリストであり、この方が神からの方、御子であることを否定しているので、自分たちの何かで、行いや知識や、何かで救われると思っているのです。その他、モルモン教もありますし、統一協会もあります。他にも数多くの異端がありますが、共通しているのは、イエスが救い主と言いながら、違うものを救いにしているということ、そしてイエスが、神が人となられた方、神ご自身なのだということを否定しています。

ヨハネは、イエス様がキリストであり、御子であるということを使う時に、「御父と御子」と言っていますね。単に御子を否定するのではなく、御父と御子と言っています。そのつながりは、手紙の冒頭でも同じでした。「1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」ヨハネは、御父と御子の中にある関係こそが、命なのだということを指し示しています。イエス様は、ユダヤ人指導者たちに次のように、語られました。「ヨハネ 5:19b まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。20a それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。…」父が子を愛しておられる。そして子が、父から言われたこと以外は何も行うことができない。父と子が一つになっているのですが、愛され、そして従うという父子の関係の中で成り立っています。それから、「5:26-27 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。」とあります。父なる神にあるいのち、また裁きの権威が子にも与えられているということ。子が父のものをすべて受けている、ということです。

この関係があって、それで初めて、私たちがイエスを信じる者として、父子の中にある関係が、自分にも祝福として、聖霊によって与えられています。御父と御子に愛されています。そしてその愛によって、主に従います。命令を行います。そして、神の子供として、御国を相続して、王として祭司として共に統べ治めます。

2A 御父と御子の関係 23

そこで 23 節で、御子と御父の関係が一つであり、切って離すことができないことを話します。

1B 御子を否定して御父を持たない

23a だれでも御子を否定する者は御父を持たず、

世の中には、神はいるけれども、イエスは信じないという人たちは多くいます。反キリストと呼ばれる異端も、イエスが肉体を取られた方、その生涯を否定しながら、それでもって光を受けた者たちとして振る舞っていたのですが、神の本質はあくまでも、その中にある父子の関係なので、彼ら自身に御父がないということです。どんなに、神との交わりがある、神を知っていると云っても、全く神を知らないのです。この方にしか、神への道はないのです。「Ⅱテモ 2:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのイエス・キリストです。」イエス様が、ご自分のことについて、弟子たちに「ヨハ 14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」と言われました。

2B 御子を告白して御父を持つ

そして、とても単純な真理をヨハネは語ります。

23b 御子を告白する者は御父も持っているのです。

ここまでシンプルなのです。神に近づく方法は、イエスをキリストとして、御子として告白する者は、御父も持っているのです。グノーシス主義に真っ向から対立します。彼らは、知識を得ることが救いであると教えていました。しかし、キリストにこそ知識があり知恵があり、この方を持っていることは、父のすべてを持っているのです。「ヘブル 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」神の栄光の輝き、神の本質の現れなのです。

多くの方が何らかの努力や、状態にならないと神を知ることはできないとします。特別な知識をもたないと、あなたは闇の中にいるとします。いいえ、御子を告白する者は、御父を持っているのです。イエス様への素直な告白、「あなたが主です。あなたがキリストで、神の子です。」という告白、

そのことによって、御父も御子もあなたの中にいてくださいます。「ロマ 10:9-10 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」私たちが、教会として、週ごとに、いやそれ以上に集まって、「イエスが主です」「あなたがキリストです」と告白していること、そこに神がおられます。

1A 反キリスト

「偽り者」

「神と交わっている」「自分には罪がない」「神を知っている」

反キリストについて話していた時に、「みなが真理を知っている」ということを否定して、一部の者たちに知識が与えられている、「あなたは知らない」と彼は云う。

1B イエスがキリストであることの否定

キリストというのは救世主のこと。

彼らが言っていることを行き詰めると、イエス以外の者が救い主になっている。

イエス様を見つめる(ヘブル 12 章)から、どんどん違うこと、違うものに引き離されていく。それこそがあたかも、中心であるかのような話。これに注意。

2B 御父と御子の否定

御父と御子が一つである、その関係こそが大事であることを否定。

父は子を愛してる

父は子に、裁きの権威を与えた

子は父の言うことだけを聞き、それ以外行わない

その父子の関係が、私たちに及ぶのが救い

愛されている

任されていく(祭司であり王)

イエスの言われることだけを聞き、それ以外行わない

2A 御父と御子の関係

1B 御子を否定して御父を持たない

神がおられると言って、御子を否定する人々が多い。

グノーシス主義
他宗教
エホバの証人

2B 御子を告白して御父を持つ

これだけなのだ、御子を告白すれば、御父を知っている。特別な悟りや、知識が与えられなければ真理に至らないとするのではなく、これだけなのだ。これが福音だ。

御子によって父に近づくことができる

「わたしを見た者は、父を見たのです」
「本質、完全な現れ」

The false teaching of those who have left the church is now revealed. It is a denial *that Jesus is the Christ*. A study of John's letters makes it plain that by this phrase he does not simply mean a denial that Jesus was the Messiah of Old Testament expectation (cf. Acts 5:42; 9:22; 17:3; 18:28). In the second part of this verse and in verse 23 he refers to Jesus as *the Son*. For a similar linking of the two expressions see 5:1 and 5:5 and cf. John 20:31; Matt. 16:16. In 4:2–3 (cf. 2 John 7) the theological error he is combating is defined more precisely as a denial that 'Jesus Christ has come in the flesh', or, as perhaps this expression should be translated, a denial that 'Jesus is the Christ come in the flesh'. The antichrists probably taught (as some later Gnostics certainly taught) that Jesus was born and died a man, and that 'the Christ', by which they meant a divine emanation, was within him only during his public ministry, descending upon him at his baptism and leaving him before the cross. They thus denied that Jesus was or is (*estin*, 22) the Christ or the Son. They made him a mere man who for a brief period was invested with divine powers or even adopted into the Godhead, but they denied that the man Jesus and the eternal Son were and are the same person, possessing two perfect natures, human and divine. In a word, they denied the incarnation.¹

¹ Stott, J. R. W. (1988). [*The Letters of John: An Introduction and Commentary*](#) (Vol. 19, pp. 114–115). Downers Grove, IL: InterVarsity Press.